

目次

まえがき	3
国際バカロレアQ&A	6

第1章 国際バカロレアとは何か

①国際バカロレアと「国語」教育	10
②プログラムの「学習」と「指導」	18
③「知の理論(TOK)」と「言語A」	30
④「創造性・活動・奉仕(CAS)」と文芸創作活動	42
【コラム①】世界が注目するIB教育	54

第2章 「言語A：文学」の授業づくり

【ウォーミングアップ】第2章を読むまえに	56
①作品の置かれたコンテキストを考える——翻訳作品(小説)	58
②作品の内外から主題を捉える——精読学習(詩)	70
③作品を比較・対比させて論じる——ジャンル別学習(小説)	84
④プレゼンテーションに向けて作品を研究する——自由選択(古典)	96
【コラム②】「言語A：文学」の定番教材とは?	108

第3章 「言語A」の実践報告

【ウォーミングアップ】第3章を読むまえに	110
①年間計画／小説と映画「人間の証明」ほか——「言語A：文学」	112
②戯曲「オイディプス王」——「言語A：文学」	122
③非文学テキスト「漫画・落語・新聞記事」——「言語A：言語と文学」	136
④単元「他者と生きる」(「水の東西」「ひかりごけ」など)——MYP	148
【コラム③】「新学習指導要領」と国際バカロレア	162

座談会：IB教育について語ろう！

—IBワールドスクール出身者による座談会—	164
-----------------------	-----

資料編

①指定作家リスト(PLA)	174
②指定翻訳作品リスト(PLT)	176
③外部評価の詳細——上級レベル(HL)	177
④外部評価規準——上級レベル(HL)	179
⑤内部評価の詳細——上級レベル(HL)	181
⑥内部評価規準——上級レベル(HL)	183
⑦「言語A：文学」試験見本——上級レベル(HL)	184
⑧DPユニット・プランナー(単元指導案1)	186

参考文献一覧	188
あとがき	189
執筆者・執筆箇所一覧	190

① 国際バカロレアと「国語」教育

【キーワード】 IBの使命・IBの学習者像・DP・MYP・
言語A・国語教育

1—国際バカロレアの概要

国際バカロレア (IB: International Baccalaureate) とは、国際バカロレア機構 (IBO: International Baccalaureate Organization) が提供する教育プログラムのことである。1968年にスイスのジュネーブに設立された非営利教育財団である IBOは、共通カリキュラムの作成や共通試験の実施、国際的な基準による大学入学資格 (以下、国際バカロレア資格^{ディプロマ}) の授与などを行っている。文部科学省 (以下、文科省) のホームページ (2017) によると、2017年6月1日現在、140か国以上の国と地域で4,846校の IB World School (以下、IB認定校) が開校されている。日本でも1979年以降、国際バカロレア資格^{ディプロマ}を有する者で18歳に達した者は、大学入学に際し高等学校卒業と同等以上の学力があると認められるようになった。IBは、単に大学入学資格を保障するだけでなく、国際理解教育の促進に資するプログラムであるため、ここ数年の教育の国際化やグローバル人材育成の流れを受けて、日本でも注目を集めている。

IB教育は、3歳～19歳までの児童生徒を対象に、以下の四つのプログラムを提供している。初等教育を意味する PYP (Primary Years Programme、3歳～12歳)、中等教育を意味する MYP (Middle Years Programme、11歳～16歳)、ディプロマ・プログラムを意味する DP (Diploma Programme、16歳～19歳) とキャリア教育・職業教育に関連した CP (Career-related Programme、16歳～19歳) の四つである。IBプログラムは、学校の実情に応じて複数を導入することもできるし、どれか一つのみに限定することもできる。IBO (2017) のホームページによると、2017年3月10日の時点で計

6,068の教育プログラムが世界中の IB認定校で実施されている。そのうち、国際バカロレア資格^{ディプロマ}が取得できる DPの人氣が高く3,101校となっており、PYPが1,468校、MYPが1,354校と続いている。ちなみに、日本国内の IB認定校と実施プログラムの数は、現在、以下の通りである。

▼表1: IB認定校数と実施プログラム

学校別	総数	PYP	MYP	DP	CP
1条校	20校	1	5	17	0
各種学校	26校	21	9	16	0
総数	46校	22	14	33	0

(参考: 文部科学省ホームページ、2017年)

「1条校」とは「学校教育法」第1条に規定されている学校のことであり、インターナショナル・スクールなどは「各種学校」に分類される。学校の総数と各プログラムの合計が合わないのは、複数のプログラムを有する学校が含まれているからである。1条校の場合は、やはり DPを実施する学校が多く、PYPを有する学校は1校のみである。逆に、インターナショナル・スクールの場合は、PYPを有する学校が多く、PYPから DPまで三つのプログラム全てを実施している学校も7校ある。

IBにはいわゆる学習指導要領や文科省の検定教科書のようなものは存在しない。各プログラムや教科ごとに『指導の手引き』や『教師用参考資料』が公開されており、原則これらに従うが、授業内容に関しては IB教育を導入した各学校が独自にカリキュラムを立てることになる。つまりは、IB認定校の数だけ多種多様なプログラムがあるということである。とはいえ、IB認定校が目指す方向性は同じである。IB教育が語られる時、必ず言及されるものに「IBの使命」と「IBの学習者像」があり、どのプログラムも「IBの使命」と「IBの学習者像」の実現を目指している。また、IB教育というと、何かこれまでの日本の教育とは異なる理念や目的を有しているかのように思われるかもしれないが、星野(2016)が指摘するように、「IBの使命」や「IBの学習者像」に示されていることは、日本の『教育基本法』(2006年12月22日公布・施行)の前文や第1章の第2条「教育の目標」が掲げている内容と基本的に同じ趣旨

である。以下、簡単な対照表を表2と表3に示す。なお、同趣旨と思われる箇所には下線を引いてある。

▼表2:「IBの使命」と『教育基本法』前文

IBの使命(一部抜粋)	『教育基本法』前文(一部抜粋)
国際バカロレア (IB) は、 <u>多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的</u> としています。	我々日本国民は、たゆまぬ努力によって築いてきた民主的で文化的な国家を更に発展させるとともに、 <u>世界の平和と人類の福祉の向上に貢献することを願うものである。</u> 我々は、この理想を実現するため、 <u>個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し、公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する。</u>

(参考:『DP:原則から実践へ』『教育基本法』)

▼表3:「IBの学習者像」と『教育基本法』(教育の目標)

IBの学習者像(原文)	『教育基本法』(教育の目標)
・探究する人 (Inquirers) ・知識のある人 (Knowledgeable) ・考える人 (Thinkers) ・コミュニケーションができる人 (Communicators) ・信念をもつ人 (Principled) ・心を開く人 (Open-minded) ・思いやりのある人 (Caring) ・挑戦する人 (Risk-takers) ・バランスのとれた人 (Balanced) ・振り返りができる人 (Reflective)	1. 幅広い知識と教養を身に付け、<u>真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健全な身体を養うこと。</u> 2. <u>個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。</u> 3. <u>正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。</u> 4. <u>生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。</u> 5. <u>伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。</u>

(参考:『DP:原則から実践へ』『教育基本法』)

「IBの学習者像」とは「IBの使命」を分かりやすく具現化したもので、10種類の学習者像が平易な言葉(原文は英語)で書かれている。一方、『教育基本法』は法律の文言のため表現こそ堅苦しく感じられるが、両者の意味するところには共通する部分が多い。例えば、『教育基本法』の「真理を求める」とは、IBが重視する「探究する人」と同義である。「自他の敬愛と協力」を重んじ「他国を尊重」とは、要するにIBの「思いやりのある人」のことであろう。このように表現こそ異なっているが、日本の教育とIB教育は同じ理想を共有しているわけである。

2—DPの科目と仕組み

先にも述べたように、IBには4種類のプログラムがあるが、国内のIB認定校に限らず、海外でもDPを導入する学校が多い。その理由は、DPを履修し、最終試験に合格した者には、国際バカロレア資格が与えられるからである。国際バカロレア資格は、大学入学資格として、世界中の大学で認められており、入学した学生に対する評価も高い。最終試験は毎年5月と11月に行われており、国内のインターナショナル・スクールを含め北半球の学校は5月試験を、国内の1条校と南半球の高等学校は11月の試験を基本的に受験する。最終試験は外部評価と内部評価を合わせて45点満点で、そのうち24点以上が合格である。ただし、大学や学部、専攻ごとに最低点を設けている大学も多く、例えばイギリスのケンブリッジ大学などは多くの専攻が入学に当たって40点以上を必要としている。また、アメリカの大学は多くの場合DPのスコア以外に、SAT (Scholastic Assessment Test、アメリカの大学進学のための標準テスト) やTOEFL等の成績の提出を推奨している。なお、IBOによると、2016年5月の試験の結果、136か国で約15万人が国際バカロレア資格を取得し、その平均は30.1点であった。ちなみに、平均点は毎年29点から31点くらいの間を推移している。

ここでは、本書の内容に関連するDPについて中心に取り上げる。まず、DPは、コアとなる3科目(必修要件)と6領域(グループ)から成り立っており、同時並行的な学びの中から「学際的な理解とともに科目の専門的な理解」と「将来直面するであろう実生活での課題と向き合う準備となる力強い全人的